

令和8年7月15日

TEL・FAX 0954-66-3113

発行責任者 江口 常雄

き ず な

す 住 み よ い げん き な みどり 緑 の さと おお くさ の 郷 大 草 野

田植え体験学習 (6月29日:月) やっと植えました！

当初、6月23日に予定していた田植え体験学習でしたが、梅雨前線の影響で26日に延ばし、さらに週明けの29日に変更して、三度目の正直、となりました。湿度が高く、モワ〜ットするような空気の中でした



会長から、苗の植え方を伝授！

が、1名欠席で14人の子ども達が集まって、さっそく、始めの会です。香田会長が、田植えの時の、苗の分け方、持ち方、植え方などを、順を追って説明しました。今年は、珍しいゲストも参加していただきました。

地域共生社会推進課に所属している国際交流員のドミニクさんが、田

植え足袋を履いて来てくれました。ドミニクさんにも自己紹介をしてもらいました。ドミニクさんは、田植えは他でも経験があるようで、3回目だとのことでした。ドミニクさんは、



にぎやかながらも、もう終盤で

アメリカのケンタッキー州の出身で、在日5年位になるらしく、とても流ちょうな日本語で、田植え中も、いろんな話をしてくれました。子どもたちは、田んぼに入りますが、例年のごとく、最初、思うように足が動かないので、土(泥)に慣れる時間が必要です。それでも、今年の子供達は順応性が高く、例年より早く終わったようです。今回は、テレビ九州も撮影に来られていて、しばらくしたら放送があると思います。左の写真は、この日の「田植え四天王」がインタビューを受けているところです。田植えの後は、子ども達から、ドミニクさんへの質問タイムもあって(左下写真)、交流ができて良かったと思います。あとは、順調に苗が育ち、稲となって大きなお米がたくさん実って欲しいと思います。上質なお米がたくさん収穫できて、美味しいご飯がお腹いっぱい食べられることを願っています。参加の皆さん、お疲れ様でした、有り難うございました！！



田植え四天王にインタビューです！



人気者ドミニクさん、質問攻めです！



みなさん、お疲れ様でした！

2年生のまち歩き体験

我がコミュニティにも 6月30日(火)

昨年も、大草野小の2年生の児童たちが大草野コミュニティを訪問してくれました。そのときは、会長に子ども達の対応をしてもらったのですが、今年は、会長のスケジュールが取れずに、事務局で子ども達からの質問に答えました。今年は、一つの班だけの訪問で、私としてはホッとしました。



コミュニティに来てくれて、ありがとう！

質問の内容は、今年は事務局の仕事の内容に関するものが多くありました。

①何時から何時まであいていますか ②休みはいつですか ③どんなお仕事をしていますか ④一番難しい(大変な)仕事はなんですか ⑤何人の人が仕事をしていますか ⑥コミュニティはいつできましたか、などの質問を受けました。

長年、大人相手の仕事をしてきたので、子ども向けの言葉の表現や使い方がとても難しく感じます。

毎年、2年生が訪問してくれるなら、もう少しトレーニングをしておかないと……。

花壇の花の植替え 7月8日：水（4年生）

今年は、昨年と違い、きっちり梅雨が居座り、この時季に予定していたコミュニティの事業が思うように消化できません。この花植えも、長期の天気予報を見て、太陽が顔を出す日に変更しました。ただ、環境整備部会員では平日にはできないので、学校の都合のいい時間に子ども達に植えてもらうことをお願いしました。幸いにも、水曜日の午後に4年生に植えてもらえる時間をとってもらえて、ホッとしました。

雨の合間を見て、一度は耕していましたが、ふっくらしていた畝が、降り続く雨でペツタンコなっていて、また直前に耕しました。



暑かったけど終わりました、ありがとう！

4年生は、ウナギの稚魚放流や蛍の幼虫放流などで一緒になりましたが、また手伝ってくれました。会長から、最初に花の植え方の説明を受けて、いざ、畑に入ります。5年生の田植えと同じく、最初は危なっかしい感じですが、途中でポイントを説明すると理解してくれます。見るだけでなく、自身の手で触り、動かしてみないと子どもは実際の感触が分かりません。大人がある程度、想像できるのは、体験の積み重ねがあって初めてできるわけですから、想像力を育てるためにも小さいときにたくさんのことを体験させてあげたいと思います。

4年生のみんな、また、いっしょに何かやろうね！

《編集後記》

「ヨイトマケの唄」

美輪明宏さんが91歳で亡くなった。彼(彼女?)のことは、これまで色々な意味で「特異な存在」程度にしか思っていなかったが、雨の日曜日の朝、彼の追悼番組があつていて、ぼんやりと観ていたら「ヨイトマケの唄」が最初に流れてきた。歌詞を聞いていた「あつ、これはおふくろのことだ!」と思った。聞き終わったときには、少しウルツとしていた。父の仕事は、いわゆる土方だ。記憶がある頃には、土木工事の現場監督をしていた。母は、私たち家族や土方人夫が生活する飯場の三食の飯炊きが仕事だった。子どもは私と弟だけ。就学前から、母は「働かざる者、食うべからず」と言つて、ほぼ毎日、20人程度の人夫が寝起きする大部屋の掃き掃除などを私にさせていた。末っ子だった母は、3歳で実母を亡くし、継母も小学校卒業前に亡くし、10代半ばで働きに出て、大変苦労をしたと思う。だから、負けず嫌いが培われた。男勝りで、口も達者で、強面の人夫とも対等に渡り合つていて、やり込めたりもしていた。母は、体型も気性もドラマ「肝つ玉かあさん」の主役、京塚昌子さんによく似ていた。「我がこと褒めるうう馬鹿者」と言う母の言葉が、戒めとして私には一番強く心に残っている。雨で、久しぶりにゆつくりできた日曜の朝、「ヨイトマケの唄」は、思いもよらず、少しの間、母のことを思い出させてくれた。